

# 築田寺だより

Ryoudenji Letter



2021.09

## 慕古昔をゆつくり しのびましよう

いかがお過ごしですか。今日は秋彼岸会大施餓鬼会です。一つの行事を共に修行できることは幸せなことですね。

ところで秋彼岸中日に行うようになって三年目。歳月はあつという間ですね。新型コロナというウイルスがあつという間に流行って、ようやく高齢者のワクチン二回が打てたと安心した途端、いつの間にコロナも変異してインド型（デルタ株）に移り、感染力も何倍にもなり若い人も伝染るようになってしまいました。生死のことが改めて身近に感じられます。正法眼蔵には「灰は灰の法位にありて後あり先あり。かの薪、灰となりぬるのち、さらに薪とならざるがごとし、人のしぬるのち、さらに生とならず。しがあるを、生の死になるといわざるは仏法のさだまれるならいなり。このゆえに不生という。死の生にならざる。法輪のさだまれる佛転なり。これゆえに不滅という。生も一時の位なり。死も一

時の位なり。たとえば冬と春との如し。冬の春となるとおもわず、春の夏といわざるなり。」（現成公案）人は死んだ後にもう一度生き返ることはない。一時のありようとして今の生がある。「生」の前後はあるがその前後は断ち切られる。一時の生に生きる私たち。時は改めて考えるまでもなく貴重なものであり毎日を丁寧に暮らしましょう。それほどトラブルもなく生きているとついその有り難さを忘れてしまいがちになってしまいます。しっかりと「生」を生きられるといいですね。

本年度のコロナ禍の大施餓鬼会をどうするかと様々考えましたが（中止または延期など）、やはり秋分の日に実行することとしました。但し、一家に一人（付き添い一名可）が本堂内に入り、その他の方は堂外にて、焼香の順番を待つて行うこととしました。決して無理はせず途中退席でも構いません。

尚、花や塔婆などできるだけ家の者が直接墓前に備え、できれば墓の石面などを水などで堅く拭くなど清掃を直にするよう心がけてください。

あと八年で再開創（洞門）から四〇〇年となります。寺史からは、真言宗次に浄土宗となり、そして曹洞宗となりました。（現在独立寺院ですが禅宗です。）永平寺三四世、後州高郁禅師が師を拜請して開山として、自ら二代目と名を山崎町この地で建立されたものです。あと八年。ちよつと無理かなと思いつつ、何となく開山四〇〇年記念式典を夢見る後期高齢者の住職です。

ちなみに初開創（真言宗）は天慶二年（九三七年）、再開創（浄土宗）は応永一六年（一四一〇年）、この地に東香堂が建立されてあと八年で一〇九〇年となります。長い歴史を有することに誇りをもち永平寺の禅師さまがここ寺を立て築田寺の墓地に眠っておられることに思いを致し、参禅会（昭和四八年十一月三日開単）、谷戸の会（令和元年開会）、しぜんの国保育園（昭和五四年四月）、町田自然幼稚園（昭和三九年九月）と共に檀信徒各家と地域の皆様との絆を深くして参りたいと念願しています。

## チベットの花 「夢の花・塔の花」



在日ネパールの友人から送られてきた写真です。メールによれば、『チベット特有のマスコツト花である「パコダ」や「マフムル」。このヒマラヤのパコダは四〇〇年ごとに咲くそうです。何と私たち世代は幸運にも塔の花が咲くのを見ました。この花ただきれいなだけでなくパワーがあつてすごい。皆さまのこれからの人生の幸運をお祈りします。』とありました。続いて、我が孫からのメールには「それはコバンノアシと呼ばれる花の蕾の画像で熱帯にしか分布して

いないのでチベットでは咲きません」と。四〇〇年に一度咲く花でちよつと気持ち良くなった私たちにすぐ、残念ながらそれは…と孫の訂正メール。でもこれを写真と共に送ってきたネパール友人の夢の手紙も捨てがたい。南方の花か北方の花かの真意は別として、幸せを呼ぶ四〇〇年に一度というキャッチフレーズも良いですね。お寺もあと四〇〇年は続けばなあと願っています。ちなみに当寺も開創四〇〇年は八年後です。

現在、絃良副住職を中心に、庫裡の改築などを計画し立案しております。出来る限り、檀信徒だけではなく多くの人が利用していく為にどうすれば良いかを中心テーマとして検討していますので皆様のご協力をお願いいたします。

## 「偶感」

先日あるところへ十年ぶりに挨拶に行ったらその家の主人から「あら、まだお元気なんですね」と言われてしまった。そういえばこの十年。園長兼住職と言っても活動はにぶり、行事の挨拶程度でお茶を濁していた。毎日のように出かけていた骨董屋通いもすっかり影を薄めて、昔なじみのお店や骨董市以外は出かなくなりなってしまうた。まあ、このキツカケは何と言っても心筋梗塞ということを契機に通院をくり返したことに勝るが、やはり寄る年波には勝てないということかと思いいながら八〇代九〇代でも元気に活躍している人を見ると、我が不養生不精進を思わずにはいられない。やはり健康も修せざるにはあらわれず「行い続けてこそ体認し実証し身につけ元気を保てることになるでしょう。しかしながら人皆

異なり、人の時光も異なる「無常」を自己には甘くみずぎていた結果によるものであり、ただ、むなしく過ぎさないう懈怠せずにいきたいとは思ふ。しかしつい我が身の衰えを高齢をその理由にしてしまいがちである。「月に釣り、雲に耕して古風を慕う」（永平広録）という一生であればかっこいいのですが。

ところで私は現在七五歳。ある人は「まだ若いですね」「これからですね」またはある人は「後期高齢者ですね」「お大事に」と言う。調子よければ「最後に何をすべきか」と思い、体調思わしくなければ「もう静かに暮らしたい」と思う。東に朝日を拝すれば清新の若さを思い起こし、西に太陽が沈まんとすれば意気も消沈す。「和尚いかなる奇特の事をみると問わば他に向かっていわん。昨日の出入息、今朝、亦出入すと。」（広録）全ての働きが現れるよう全機現であり続けたいものですね。